様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　６ 月　９ 日現在

機関番号：３６３０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2017～2020
課題番号：１７Ｋ１３４５２

研究課題名（和文）中国青海省大通県チベット族居住地域の漢語方言調査研究

研究課題名（英文）An investigation of Datong dialects of Chinese spoken in the Tibetan-inhabited area

研究代表者
川澄　哲也（KAWASUMI, Tetsuya）

松山大学・経済学部・教授

研究者番号：３０５９０２５２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,000,000円

研究成果の概要（和文）：本科研では中国青海省西寧市大通県東峡鎮の漢語方言について調査を行い、その音韻論、およびいくつかの文法的特徴を明らかにした。本科研ではまた、漢語がモンゴル系言語やチベット語といった少数民族言語と接触した際に起こし得る言語変容の類型を提出することをも目指した。この類型は、接触を経験したことは明らかであるものの、その詳しい歴史背景までは知られていない漢語変種の形成過程を考察するのに役立つ。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本科研は第一義的に、言語が接触した際に如何なる原理が働いて変容が起こるのかという点に対して実証的考察を試みたものである。先行研究では十分に扱われていない側面であり、その成果は今後の接触言語学の進展に寄与し得る。また本科研が扱う中国青海省西寧市大通県東峡鎮の漢語方言はこれまで体系的に調査されたことがなく、そのデータ収集自体にも大きい学術的意義がある。
これらと並行して進めた、接触相手ごとの漢語の変容類型を構築する作業には、従来形成史が不詳であった漢語変種の形成過程解明に役立つという意義と、史料に乏しい西北地域の歴史(特に民族交流史)を言語学の立場から填補できるという意義が認められる。

研究成果の概要（英文）：This project investigated a Chinese dialect spoken in Dongxia town, Datong County, Xining city, Qinghai Province, PRC. In this project I revealed the phonology and some grammatical features of the dialect. This project also attemped to provide a typology of language changes in Chinese due to contact with minority languages such as Mongolic and Tibetan. The typology serves to examine the formative processes of Chinese varieties which experience language contact but of which detailed historical backgrounds are still unknown.

研究分野：接触言語学　漢語方言学

キーワード：漢語　チベット語　言語接触　青海省

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

接触言語学の専門家サラ・トマソンは Thomason(2001)において、接触により言語が変容する際に作用する原理の１つとして“Negotiation”を提案した。これは、接触状況にある異変種の話者同士が互いの言語特徴を取捨選択しつつ歩み寄り、新たに第 3 の体系を構築する、というものである。しかしながら、この原理は純に理論的観点から案出されたものであり、詳しい内部実態については同書およびその後の諸研究でも明らかにされていない(この点には、考察の際に必要な経験的証拠を得難いという要因も少なからず関わっているものと思われる)。

この状況に対し、筆者はかつて JSPS 科研費(若手 B: 26770154)の助成を受け、“Negotiation”の実態解明を主な目的とする中国青海省西寧市大通県の漢語方言調査を実施した。大通県には漢族の他、土族(モンゴル系)やチベット族が多く暮らしており、いずれの民族も、地域ごとに一定の差異をもつ SOV 構造の特異な漢語変種を話す。それらの変種は、当地の土族やチベット族が漢語へと言語交替する過程で母語からの干渉を受けて原形が生まれ、その後“Negotiation”を経て漢族に受容されたものと解釈できる。趙(1994)によれば、大通県では土族やチベット族が集住する村落(「民族村」)と、漢族と土族、或いは漢族とチベット族が雑居する村落(「雑居村」)が分かれているという。この状態は“Negotiation”の実態を解明するための好条件と言える。即ち、雑居村の(、特に漢族が用いる)漢語は“Negotiation”を経験したはずの変種であるのに対し、民族村の変種は、言語交替後、本来の漢語との再接触が限定的であったと考えられるため、雑居村ほどの“Negotiation”は未経験で、形成当時の原形を比較的よく保存していると推測できる。

このような予測の下で行った前科研では、大通県西部と中部の、共に土族が関わる民族村・雑居村の 2 地点において方言調査を行い、例えば民族村では土族語由来の奪格標識を用いるのに対し、雑居村ではこれを使わないという差異を明らかにした。これは、「自らの変種とは異質な要素は受容されにくい」という性質を“Negotiation”がもつことを経験的に示し得た初めての事例と言うことができる。しかしながら、“Negotiation”の研究はようやく端緒についたばかりであり、更なる実証的考察を積み重ねていかねばならない状況が続いている。

また、世界有数の多民族・多言語地域である青海省東部一帯には、モンゴル系言語、あるいはチベット語との接触の影響で変容したと考えられる漢語変種が多く分布している。但しその中には、具体的な接触相手や形成過程までは考察が及んでいないものも多い。後述するように、それら変種の形成史を明らかにすることには当地の歴史研究への貢献が期待できるが、先行研究ではこの点に関する問題意識は存在していない。

２．研究の目的

本科研は、上述した前科研を引き継ぎ、大通県東部の、チベット族が関与する雑居村・民族村の漢語方言調査を進め、“Negotiation”の実態解明を更に進展させることを目指したものである。なお、当該地域の漢語方言についてはこれまで体系的に調査されたことがないため、そのデータを収集すること自体も本科研の重要な目的の１つに位置づけられる。

また、漢民族が長らく安定的に統治してきた中原などの地域に比べると、諸民族の興亡・攻防が盛んであった青海省東部一帯は史料の量が極めて少ない。この不足に対し、言語学的分析を援用して補填を試みるのも本科研の大きい目的である。青海省東部の漢語諸変種に見られる他民族語からの影響を抽出することにより、当地の民族交流史を浮かび上がらせることを目指す。

３．研究の方法

“Negotiation”の実態解明に向けては、上記項目「１」で触れた前科研と同様の方法を構想した。具体的には、チベット族が多く住む大通県東部からチベット族が関与する雑居村および民族村を選び出し、それぞれの居民に対する言語調査を進めたうえで 2 地点のデータを対照し、“Negotiation”の過程で生じた可能性のある差異を抽出する、という方法である。

形成史が不明の漢語諸変種に関してはまず、考察の拠り所となる、接触相手ごとの漢語変容の類型を構築する作業を進める。青海省の五屯語、或いは隣接する甘粛省の唐汪話といった、先行研究ですでにモンゴル系言語、あるいはチベット語の関与が明らかにされている変種を網羅的に分析し、更には筆者による前科研・本科研の収集データをも追加し、漢語がそれぞれの言語と接触した際に起こし得る典型的な変容を把握する。そしてその変容類型を参考にして、形成史が未詳の漢語変種の成立過程を探っていく。

４．研究成果

上述した雑居村に当たる村落として東峡鎮(漢族 9987 人、チベット族 5177 人[2000 年統計値])を選定し、当地の漢族を対象とした方言調査を 2 度行い、語彙約 3000、例文約 200 を収集した。

音声に関しては、以下の諸特徴を指摘することができる：

・音節構造は「頭子音(Initial)+わたり音(Glide)+音節主音(Nucleus)／声調(Tone)」とまとめることができる。漢語方言としては珍しく、韻尾(Final)を設定する必要がない。

・分節音の音素体系は子音 24 種、母音 8 種(うち口母音 5 種、鼻母音 3 種)である。
・声調は、音声的には 4 種の調値が頻出するが、音韻論的には 3 種にまとめることができる。中古音の体系と比べると、旧平声と旧入声に合流が見られる。
・2 音節語では基本的に、第 1 音節要素の声調によって語全体の調値が予測できる。語声調(word tone)の性質を有していると考えられる。

文法に関しては、青海省東部一帯の特徴とも言える、SOV 語順、後置型の格標識使用といった点がここでも確認できた。以下に数例を列挙する。

a) 我　漢語　三年　学　了。
　私　漢語　3 年間　学ぶ [完了]
「私は漢語を 3 年間学んだ。」
b) 我　他　xa　打　了。
　私　彼　を　叩く [完了]
「私は彼を叩いた。」
c) 我　他　lja　一様　高。
　我　彼　と　同じ　高い
「私は彼と同じ背丈だ。」

東峡鎮の変種で最も興味深かった文法現象は、離合詞の「倒置」用法に関する前科研調査結果との違いである。SOV 語順を多用する大通県の漢語ではしばしば、いわゆる「VO 型離合詞」を倒置し、OV の順で使うことがある。この現象自体は東峡方言でも確認できた。

d) 業　畢下 zhe　　馬上　把　婚　結上了。(標準変種での形は“畢業”・“結婚”)
　学業　終わる[完成][非終止]　すぐ　～を　婚姻 結ぶ[付着][完了]
「卒業してすぐに結婚した。」
e) 我　覚　睡　了。(標準変種での形は“睡覚”. 当要素は標準変種でも倒置が起こりやすい)
　私　眠り 眠る [完了]
「私は眠った。」

しかし、前科研の土族民族村の変種では許容された“問好”(“我他啊好問了。”「私は彼に挨拶した」)の倒置は、東峡方言では非文と判断された。また土族民族村では可能だった“結婚”の単純な倒置(“婚結了。”)が、東峡方言ではやはり許容されず、例文 d のように“把”構文の助けを借りなければ倒置できなかった。

これら差異に対する現段階での筆者の解釈は次の通りである。標準漢語の離合詞に関する研究書である周(2006)には、“問好”は如何なる手段を用いても倒置ができない離合詞だと記述されている。また“結婚”については、単純に“婚結了”のようには言えず、“連婚都不結”のように、何らかの構文の助けを借りなければ倒置できないと記述されている。土族語話者集団は、漢語へと言語交替する際、これらの知識を有していなかった蓋然性が高い。そのため、母語の OV 語順の強い影響の下、“問好”“結婚”までをも倒置して用いた。一方、土族の漢語と再接触した漢語話者集団は、VO 型離合詞の倒置という表現法を一定程度受け入れたものの、“問好”“結婚”の倒置については、上記知識を有していたため、受容しなかった。

この解釈が成立するならば、本事例は前科研で“Negotiation”の中身として提案した、「自らの変種とは異質な要素は受容されにくい」という見解を補強する新しい根拠ということができる。

本来であれば、この点の確認を含む本科研の仕上げに向けた調査を行うべく、2020 年度は春期・夏期に大通県向化郷のチベット族民族村に赴く計画であった。しかしながら、周知のとおり、COVID-19 感染拡大の影響を受け、中国へ渡航することが不可能な状況となった。その結果、調査研究が最終局面まで達していない部分も残している。この点については、今後実地調査の再開が可能となり次第、できる限り速やかに補完する。

接触相手ごとの漢語の言語変容類型構築に関しては、現在までの調査によって以下の諸点が明らかになっている。

【モンゴル系言語と接触した場合の変容類型】
ア．SOV 語順を基本とする。
イ．名詞に後置するタイプの格標識をもつ。
ウ．複数標識“們”が非人間名詞にも付加可となる。
エ．副動詞語尾に似た要素をもつ。
オ．連用修飾語が否定詞に先行する。
カ．「『定』の名詞+場所詞+“有”」という存在表現をもつ。

【チベット語と接触した場合の変容類型】
キ．SOV 語順を基本とする。
ク．名詞に後置するタイプの格標識をもつ。

ケ．複数標識“們”が非人間名詞にも付加可となる。
コ．数量表現が被修飾語に後置される。
サ．形容詞が被修飾語に後置される。
シ．主観-客観パースペクティブの対立がある。

このうち、エ.～カ.及びコ.～シ.の諸特徴が、言語接触を起こした相手言語を推定する際に有用となるものである。川澄(2019)では試みにこの類型を用い、従来は土族語との接触のみが指摘されていた青海省海東市民和県の漢語甘溝方言について、それがコ.の特徴をも併せ持つことを論拠に、チベット語との接触についても考慮する必要があることを主張した。

＜参考文献[言及順]＞

1．Thomason, Sarah G. (2001) *Language Contact. An Introduction.* Georgetown University Press.
2．趙相如(1994)「大通回族土族自治県」中国社会科学院民族研究所・国家民委文化司主編『中国少数民族語言使用情況』中国蔵学出版社：336-338.
3．周上之(2006)『漢語離合詞研究』上海外語教育出版社.
4．川澄哲也(2019)「漢語甘溝方言の形成過程再考」『言語文化研究』38-2：1-23.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計8件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　7件）

１．著者名 川澄哲也	４．巻 ２１
２．論文標題 漢語甘溝方言のテキスト	５．発行年 2019年
３．雑誌名 Contribution to the Studies of Eurasian Languages	６．最初と最後の頁 75-95
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 川澄哲也	４．巻 39-2
２．論文標題 陝北山歌「信天游」における1人称代名詞“奴”について	５．発行年 2020年
３．雑誌名 言語文化研究	６．最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 川澄哲也	４．巻 38-1-2
２．論文標題 近代漢語「呵」の時間義用法に関する覚え書き(2)	５．発行年 2018年
３．雑誌名 言語文化研究	６．最初と最後の頁 417-426
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Tetsuya Kawasumi	４．巻 30-5-2
２．論文標題 Typology of Language Changes of Chinese Induced by Contacts with Tibetan	５．発行年 2018年
３．雑誌名 松山大学論集	６．最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 川澄哲也	4．巻 38-2
2．論文標題 漢語甘溝方言の形成過程再考	5．発行年 2019年
3．雑誌名 言語文化研究	6．最初と最後の頁 1-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Tetsuya, Kawasumi	4．巻 37-2
2．論文標題 Typology of Language Changes of Chinese Induced by Contacts with Mongolic Languages	5．発行年 2018年
3．雑誌名 言語文化研究	6．最初と最後の頁 53-68
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 川澄哲也	4．巻 20
2．論文標題 試論漢語河州話的形成過程	5．発行年 2018年
3．雑誌名 ユーラシア諸言語の多様性と動態	6．最初と最後の頁 179-190
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Tetsuya KAWASUMI	4．巻 22
2．論文標題 A Phonological Sketch of the Datong Dialect, Qinghai Province	5．発行年 2020年
3．雑誌名 現代中国語研究	6．最初と最後の頁 25-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 川澄哲也
２．発表標題 青海省大通県東部方言調査報告
３．学会等名 2019年度日本中国語学会九州支部第2回例会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関